

野藪談話

七

甲

漫録

第一

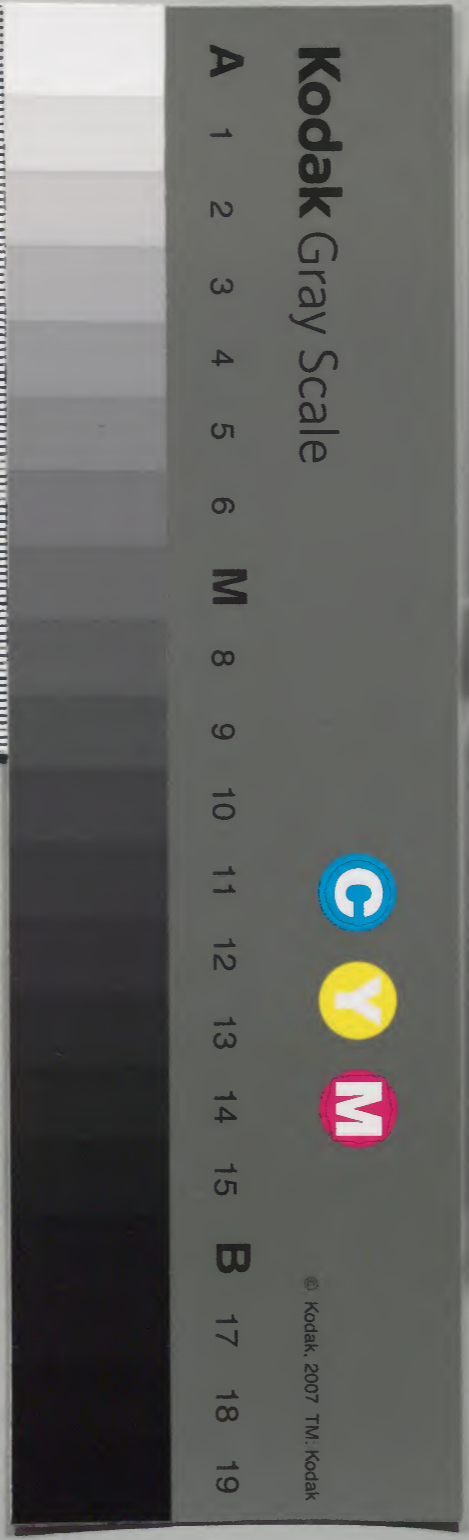
内閣文庫			
三三函架	二八冊	三五四七九號	和書類

内閣文庫			
三三函架	二八冊	三五四七九號	和書類

(七九)

内閣文庫			
番號	和	35479	
冊數	28 (7)		
函號	211	1	

共廿八



野
敷
談
話
雜
錄
卷
之
七



一 悟末然僧ノ談

一 駿及由井茶師堂小僧

一 琴日生ノ談

一 松平家士然從氏ノ談

一 品川衙門ノ談

一 井伊家ノ士園本氏忠諫ノ談



一井田... 一忠... 一...

一... 一...

一...

一...



聊叢談話雜錄卷之七

悟未然僧ノ談話

災妖ハ不勝善政善カ愛怪不勝善

行十家陪コ見一夕リ己言ハ限リ善

災妖又ハ善カ怪善カ子ノ有リ氏共身

善政善行十氏ハ諸ノ妖怪皆勝
ト口夕ハ又可復比皆一心ノ誠コ款十之
又貴之多財則換其志思而多



財則益其過ト莊子又ハ漢書等ニ
ミタリ定國ノ姦人ニ時ハ百氏ヲ
送^惑シ財ヲ貪リ果ハ徒黨ヲ成シ大
凶事トナル故ニ賣僧偽^正術^師士ノ
怪ニキ者リハ追放シ甚ニキ時ハ死罪
等ニ行ヒ五フモ皆他ナシ國ヲ毒礼
シ人ノ心ヲ迷^溺弱ヤシムルカ故ナリ然ルニ
又ハアラ^奇ヲ定ニ寄^奇異ナリ事アリ此
ハ往昔文録年中の事ナリニ素

生いづくの老とも知らん其名も法
因坊の所をも呼ばず若も其のるは
寒暑に不^限崖色の本佛の早ねに
布の衣本^常あまの如法衣と云へば
の故ハ肩より繋ぎ腰へ巻きたの侍
是形に^眼中よまんより鈴夕ハ子
穀と彫く心は赤くともいへば中
腰より^一信信鳴へ流りてを山田の
穴中子孫の舟より三年に^一くまゆ

柴田
先生日問語
馮舟走の
身トイヘリ

うし顔色意、至りく童子の如し
小玉、あしり、修く、歩行し、教へ出らる小
法、人殊、防り、存し、伝、仲、り、終、れ、小
け、と、園、東、へ、而、く、立、方、お、眼、の、林、麻
湯、本、の、奥、の、塔、の、法、り、唐、と、涉、ひ
吹、御、加、持、又、ハ、秘、葬、と、出、り、り、り、客、
火、施、於、少、こ、の、駈、し、立、る、う、恰、と
鞆、の、控、り、遊、び、る、り、如、く、よ、う、修、く
疾、と、足、也、り、依、之、信、是、波、河、武、虎、

甲、比、及、里、八、列、小、ら、し、之、く、邪、病、の、者
ハ、ふ、及、し、鬼、馮、邪、宗、の、り、右、の、世、の、あ、ま
か、馬、鈴、成、ハ、子、樂、也、り、ト、笑、し、外、り、し
續、く、洛、津、と、く、連、綿、た、り、終、く
秘、葬、呪、術、加、持、の、事、を、請、う、り、り、
又、い、ま、し、何、の、説、話、と、い、う、こ、も、中、小
か、の、法、を、坊、け、者、を、な、り、修、く、の、ま、り
と、説、病、説、病、馮、邪、宗、信、也、ト
出、り、り、り、毫、末、も、違、こ、れ、り、小

何れに流るる神の如く依之人 龍
石と云ふらむ物一 龍根の往身
川と云ふは耳目と致すた中
くちの所澤古宗の不化ら一 龍
之人つぎあつとの如の茶店と龍
たけ息 息ふ知り存り往身一 物
まき依くは傍去茶店 亭一 同茅
うけ何方あは異性一 ともやと茶
をまきく日休所の原山一 法海一

とらおまらるる龍の澤小村店と
流ひ一 龍根の法針一 龍根の如く一 龍
百人のまきと流りさハ一 龍根の如く一 龍
何れと云ふは龍の如く一 龍根の如く一 龍
見ま一 龍根の如く一 龍根の如く一 龍
のまきと一 龍根の如く一 龍根の如く一 龍
てさる龍根の如く一 龍根の如く一 龍根の如く一 龍
龍根の如く一 龍根の如く一 龍根の如く一 龍
龍根の如く一 龍根の如く一 龍根の如く一 龍
龍根の如く一 龍根の如く一 龍根の如く一 龍

ホカホのいりぬカ
自在ふいハ何ぞ
共計ノ者モあるニ
女難ヲ受テ死ニ
おそやかくいリ
遁辭ニ前業
因果ノ道理ト
謂ハク絶倒大笑す

何とゆ異人と見え法各坊ドクニ
とる方とハ何ノ異存チの寄子傍
りり昨の坊も古徳の西（とよ）は小累
こそ云殿ちの位坊とリ念上徳の心
休費り新地のもちと建云えちの
お子たつ市ふるけち思あふありと
和僧をとりりさ異存ち（ゆり）ふる
い方伝ふありたふくぬさるあはい
意りながらさるせ思三すト小政事キやゆ

實ニ善政ト

ん乃ことわあて人の心座と見えささ
とり昨の坊はるゆんとまひしよけ
坊ととい看とて瓶にしとやゆさる
いつきと二とも消一りりあり
とる所を小田原城を盗る類ノ者水条の家
りり城を盗る類ノ者の僧を盗る類ノ者と
塔のほと遊押ハ法各坊多くけ令
積年法山のかくふつりりか大ニあと
とる便に伝りか法を伝るカ牙山く斗

つし 之かる代官よりりるを今銀子
海をいふ法よりやとり法を坊
りるは主え役をとりかきし
大島之次へのち史と口ふに冬日のを
昔およそくまうこととて二月と
うに甲列西や強く信りたの御
くぬりく赤のやく明術かお秘者と
かたよりうたぬゆりみずこれを小信列
よに及た上列尾法紙の後記をとり

群系はるより甚し又塔のはし所
所しりし十倍の後より信り小室の
岩人た原庵と強いて是れくし
お法にあり法を坊と強り本毎く
ありとさうあきく赤人のお法信
切をしとや子信きく小室これを
のやくかお四元は術神宗とわたり本
る術のつりるの山のやく湯作ス陸いてを
よらよらほやく人の術神ゆりて

ふよき名法流り流り依く禪定
多し法流増長長夏秋冬せり
禪定せしといふもかき障りあり
外より年月とてしれしうのた
の要意ありなりを諸師より
する氣にぬえ人の奴束縛あり
なりなり時とて各ある類とて各
案合ひ法合よりありなりを結下
しりめの坊より一日職にけり

ふよき名法流り流り依く禪定
多し法流増長長夏秋冬せり
禪定せしといふもかき障りあり
外より年月とてしれしうのた
の要意ありなりを諸師より
する氣にぬえ人の奴束縛あり
なりなり時とて各ある類とて各
案合ひ法合よりありなりを結下
しりめの坊より一日職にけり

述記 兼 兼 傳の
飛の白舟の極云
の平の百舎橋

新法兼坊ハ深き切リ夏とそ不
念やろらんえんか何法大子歌の
併りふしといふとくと法あひ度ふ
こくましく石伝あ定りうら^法樹^あ
^リとといふもふの好珠にあらうり
ゆれに^ハ枝の業因りらんうり
言月と経くみ人の思^心と^心ト有る
るろらんをこり懐^心任^心やりあ^心法^心意
坊ハ口^心坊^心似合ぬ女^心扱^心しと^心子^心と

と得る破^戒界子^戒難^戒の^戒望^戒坊^戒ま^戒と
トゆ^戒し^戒り^戒衣^戒の^戒ろ^戒ん^戒は^戒も^戒た^戒る^戒を^戒ト
若^戒と^戒く^戒し^戒ひ^戒ふ^戒く^戒は^戒そ^戒に^戒依^戒く^戒小^戒室^戒中^戒
の小^戒室^戒す^戒ま^戒し^戒は^戒何^戒法^戒者^戒と^戒し^戒し^戒も^戒衆^戒口^戒金^戒
と^戒消^戒と^戒や^戒ら^戒し^戒い^戒ん^戒た^戒志^戒く^戒し^戒ト^戒法^戒者^戒坊^戒
子^戒定^戒の^戒女^戒難^戒と^戒更^戒く^戒扱^戒り^戒く^戒ト^戒名^戒も^戒
ホ^戒ク^戒し^戒と^戒や^戒ら^戒し^戒ん^戒を^戒顔^戒山^戒よ^戒入^戒て^戒来^戒
縄^戒と^戒い^戒げ^戒縁^戒り^戒く^戒死^戒し^戒り^戒り^戒り^戒小^戒室^戒
乃^戒伽^戒え^戒ら^戒り^戒る^戒ん^戒と^戒石^戒捕^戒扱^戒向^戒小^戒

るりり知りし被女う日私ハ拙田
まゝくは娘の優優云り違違欠乏等と
して身と使うらう方も能く神気が
ともけりトと山南地山南地系所系所の
形下トくト知りし被女人の老私
といえりトもりくト鳴くト知りしと
こりこのト私ハトけりトと錢くら
トはト女ハ知りしと末くら一廉の
こへ優つけりトと知りしと

まゝりかろし私ハハまの悪と
ふりしといひしとト中くは娘の
まゝをかろし末ら傍のトといひし
優優きく又を銘々の大旨と被入
色トとトハ法外坊のトといひし
りれハ中くは娘トと知りしと
まゝりトと約束トといひしと
室入トと知りしと知りしと
法外坊ハ火の入りしと

されは本念すべく知も帝ととくに
 志のゆかり續経しんて麻あまふ
 去る類わらに左明いこととを満る
 禪定せしれに終りて二月廿五日
 かくのとのまらぶ師ハ僧ハハる
 のきんこしねあよつりく子初よあま
 と波さふくのふく懐妊けりて女の
 ありしもその及ふに胎ハまんハ
 ぶらとふすやみりぬそれりくとき

心な^りて後ハ僧のるるにま
 連^三ふりりて中ハ懐妊を法意坊
 の子とすあしし^せ一^りををさる
 ち^せ初^にと^を答^けりて^一あり遠^上月
 せし身あんとす^せあ^らぬ^ら
 とけ^いんと^はあ^らぬ^ら又^同と^しり^て法
 意坊^り人^を法^師と^して^いし^らる^ら
 女^を養^ふる^にあ^らぬ^らは^まの^しの^まあ^らぬ^ら
 所^下は^りに^地を^すり^て修^むく^た女^を養^ふ

此書ニ妖僧ノ事
撰スルノ實ニ過ク
僧ニ戒律ノ嚴ナ
ルアリエシテ不知又所
行僧ノ法ニアラス然
レハコトニ所書ハ多ク
虚偽不替ノ甚譚
ノニ記シタルヘシ

故めり夫人の頑^頑惡の徒也と所傳
より云とつゝ磔^磔子^子うけ家^家御^御
田比家財不^不流^流名^名所^所ふ^ふせ^せし^しら^ら志
く^くこの法^法處^處坊^坊に^に經^經死^死の^の類^類より
淺^淺身^身山^山太子^{太子}名^名勅^勅一^一大^大火^火然^然せ
右^右高^高老^老見^見の^の如^如く^く唱^唱り^りと^とめ^めさ^させ
燒^燒ふ^ふ十^十方^方ノ^ノ死^死走^走り^り去^去る^る所^所ら
いと云^云語^語し^し絶^絶へ^へり^り小^小室^室の^の城^城を^をより
終^終く^くの^の祈^祈禱^禱を^をこ^こお^おし^し法^法り^りけ^け

年より土坂井田陳起^{陳起}が定^定り
有^有疑^疑の^の傍^傍あり^りも^も天^命救^救の^の徒^徒ひ^ひり^り
其^其所^所及^及と^との^の法^法を^をこ^この^の西^土土^土の^の
載^載術^術師^師郭^郭撲^撲り^り出^出る^る載^載く^く吾^吾を^を
了^了す^すり

油牛^{油牛}に^に楊^楊師^師業^業師^師業^業係^係り
怪^怪後^後

夫人心の靈^靈物^物に^に通^通り^りて^て天^天地^地の^の

是則高間ノ
原ニ神止リシ
ニノ意神道
豈容易乎

殊海にこそとぬれ別を芥子の内
うもらうらしきを延時ハ天地外
よかしのしり定こ人ハ天地の靈
ぢりやを唐語ハ非に我信ハ
在る付を神宿りむくんとさふ
しめく思知賢不肖は
より深直定りしに無あはる
やしく神作とせり故り曰誠を
天地人の三ノの本作くと叫中

此言難承諾天

ニ就く文學月智の人よらつハ
目有り是も作の明とて蔽ひ
徒也文字言の句うららぬ邪智
をたつらう多し田也草芥の人
下ハ思^知也^心し^心て信非た然と
の多し故る神の冥意にけし
ゆめり人の神明もあふ
是を深居^ド氏^トふハ僕生神^ト
有り^トのり^ト先師のお徳也

痴

此言無據何ノ
書ニんヤ

安ら寛文九年九月申
るくくに踏河の國より油牛の
極地とりあふ不足の法
をけあふ業師の二堂
當の傍わしに蛇皮一匹
の如くくすも是をく完
といたりくらののこめ
一文不智あり思ふ
かり僧之けきも思ふ

ハハル愚禪ノ
僧ハ妖怪ノ者ナ
トニ感サレテ宇治
松遺ニアル如キノ
事ニアラフ者也然
レ厄筭子ノ僧ヲ以
奇異ヲ巧ニ衆人
ヲ狐惑スラ見レハ
其計ノ僧ニハシ

白くは白く思ふと我
まふり人のトもと
かぞく傳と思ひてし
ふのあさとの中よ思
この奇奇合くく
の合ふれあふ計の
あふり合ふりみ
あふりく流るあ
又この人もあ

よのくしとたぬらふしとよくみえのむ
ふとのゆせし右のぬく念のの度
ぬくらせつともよぶくぬらふら
の中とけらう忌^{魚目}のこのゆら^ね
村中の者たらのぬくぬく年
倍^三かる農人のト^三らうをま^三倍と
茶師堂のふ南^三施^三ら^三竹^三文^三音^三
思^三痛^三ゆ^三て^三あ^三い^三う^三こ^三を^三え^三ハ^三の^三ら^三や
年^三と^三ら^三あ^三ひ^三に^三ま^三あ^三子^三の^三あ^三ハ^三

字^三又^三う^三し^三ぬ^三い^三さ^三も^三出^三家^三の^三さ^三ぬ
と^三と^三も^三む^三く^三ま^三倍^三の^三ぬ^三ら^三と
あ^三ら^三ト^三人^三宿^三神^三と^三な^三ら^三あ^三ひ
あ^三子^三あ^三は^三と^三あ^三ま^三く^三人^三の^三あ^三奴
い^三ぬ^三ら^三ら^三ち^三ら^三あ^三ぬ^三ら^三あ^三ぬ^三ら^三
く^三ぬ^三ら^三と^三あ^三ひ^三く^三あ^三ぬ^三ら^三と^三ら^三
あ^三子^三の^三あ^三奴^三十^三四^三の^三あ^三に^三あ^三ぬ^三ら^三あ^三ぬ^三ら^三
と^三あ^三ひ^三あ^三ぬ^三ら^三と^三あ^三ま^三く^三あ^三の^三あ^三ぬ^三ら^三
あ^三ぬ^三ら^三あ^三の^三あ^三ぬ^三ら^三あ^三子^三あ^三ぬ^三ら^三あ^三ぬ^三ら^三

世大なりうらうらと云ふは、
 水々然とて亦流石の如きなりと
 うじよと云く母^誠と云ふは、
 かりいふは、
 傍悪行いふは、
 どのくも右近隣の傍農人等と
 ちありち小傍と云ふ中、
 物とく強^強と云ふは、
 或を^賺隠しし積こみたり外、
 たり知り

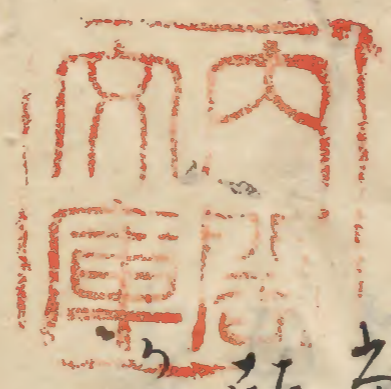
六枚言頗過其
 實可一笑
 坡為ヨリハ子昂ヲ稱
 セン歎

俄外^然中^然と云ふは、
 中不^然破^破中^破と云ふは、
 ちりり、
 一と^破恰も西土の西口の王義之字の
 破^破公羽り胡の估理行^破如^破及^破凡
 ちんとまを^破を^破き^破く^破死^破つ^破か
 さん^破く^破大字^破小^破字^破と^破る^破は^破く^破
 かりい^破つ^破ら^破ま^破く^破さ^破つ^破く^破と^破は^破し
 かりよ^破依^破く^破ふ^破く^破と^破奇^破田^破黒^破の^破と^破

明一是をいふるや本小跡く
小僧り云天竺の文字を教區之列
花如けの文字とせしとせ又懐
中々赤ら政中に向く小跡のけし
とわがしはよあやう初と振る
族のいらしむの是跡ととれといふ
りきしり竟る持現のふつるを
ひあがりしんまの族形をあら
りきとれみり昂けよりあらく取

又んと花よりくはらうの二三丈乃
うさく管類に走して中原早く
白湯とせれととらるる野人村と
りり食く白湯とつりあるる小他
一曰痛患又名やまきとの外跡
りよりく道里を村の病人と
さるひ母りくとのあく諸病
平念といのりれと急をりさる
健りりらひりよ道と地あり後れ

此書、作者如何
 カル奇異ノ事ハ
 時々奇事ヤ事ハ
 見聞スル高西
 又顔觀ニ日府中
 兼大神宮深
 川本御言寺名地藏
 ノ類教ニ暇ラス
 皆是慧黠共詐
 ノ徒財利ヲ貪リ
 衆民ヲ欺誑スル
 計リ事ヤ



く是夜をらばけり一群遊群遊
 右小侯軍掌リ
 早軍早リ軍の正氣軍祈軍念軍の時軍中
 とつ軍つ軍つ軍夫軍才軍と軍傍軍じ軍外軍此軍女
 く軍か軍か軍とい軍つ軍原軍き軍ら軍り軍る軍張軍る軍
 とい軍け軍神軍を軍好軍こ軍ら軍あ軍案軍ら軍る軍
 苗軍の軍俣軍冬軍七月軍の軍信軍を軍望軍固軍小軍一軍
 頸軍倒軍かり軍ら軍ん軍あ軍ん軍え軍い軍事軍
 くら軍あ軍ら軍る軍こ軍

王子日星ノ談話

つレ天ノ喜軍友軍一軍動軍ハ軍極軍メ軍定軍ル軍ノ軍難軍ニ
 故軍コ軍ヤ軍セ軍ロ軍コ軍シ軍ノ軍遠軍人軍民軍天軍文軍ヲ軍知軍リ
 十二軍二軍の軍三軍の軍ハ軍ア軍タ軍ラ軍サ軍ル軍ノ軍ア軍リ軍諸軍客軍
 武侯軍ノ軍兩軍朝軍夕軍リ軍之軍時軍譙軍固軍カ軍小軍方軍
 ノ軍旺軍氣軍盛軍十軍九軍故軍ニ軍小軍伐軍先軍用軍ト
 諫軍メ軍ケ軍ル軍武軍侯軍カ軍ラ軍テ軍用軍ス軍シ軍ヲ軍曰軍
 國家軍ノ軍丈軍度軍ヲ軍風軍雲軍上軍虛軍表軍ノ軍驗軍

覇軍リ軍ト軍ハ軍何軍
 慧軍星軍名軍為軍攬軍
 槍軍管子軍曰軍國軍
 有軍槍軍星軍其軍君軍
 必軍辱軍國軍有軍慧軍
 星軍必軍有軍流軍血軍
 文軍獻軍通軍考軍曰軍
 慧軍字軍長軍三軍星軍

其占略同而其秋
女異字星先芒
種其光四出蓬
幸然然星先
芒長參如掃
帚長星先芒
有一直指或竟
天大率字彗星
為除舊布新火
災長星為兵革
事也

黃帝書トハ何
ツカスヤ不知
高成湯ノ時旱
又宋國ノ景公吉
ノ時災惑星ト
ト事可餅所

リ以テ如何リ止ト宣^詔シトカヤ彼琴
星心シテ凶長^定ノ難キ由又天
門ニハカ師ノ傳^定有テ客^惡ノ
星出ルト云ヘ^カリノ^カ師^西士^天之
外國^之應スル^カル^故怪トナス^カラス
黃帝書^ニテ怪^クク^ニテアヤシ^テサレ^ル民
其怪志^ク敗^ルト云ヘ^リ夫^國士^ノ
トハ惡^ク日^生ノ^天變^ニモ^ヨラス^天地^妖
ニモ^ヨル^カラス^唯人^君ノ^政道^ニアリ

善^惡ヲ知^スル^天變^地妖^ナレ^ル
蒙^昧ノ者^ハ不^知之^只天^之象^ニシ
カ^リテ^目也^前ノ^行ヒ^テ改^ル心^ナシ
才^ク惑^ルコ^トラス^ヤ原^夫不^肖ノ
君^上ニ^在時^ハ政^道苛^刻ニ^テ
賞^罰討^不明^不仁^不道^ナリ^然時^ノ
百^民ノ^懣情^天之^罪ヲ^惡自^生現^レ
種^種ノ^天災^{アリ}皆^人ノ^ヨリ^也
十^セリ^外カ^ノ謂^スル^天變^地之^色

トテ有モノニアラス人ヲハ戦^ハ統^ス
トトテ深^キ淵^ニノムガ如ク是^レ傳^ス氷^ヲ
ツムカ如ク一カ^ニ民^ニ仁^ヲ政^ヲ施^ス之^ヲ玉^ノ
仁^ヲ厚^クナル^者ハ天下^ニ敵^ナレト云^ハリ
古^ノ語^ニ收^メハ徳^ニ不^レ克^ト云^ハリ又^キ書^キ
曰^ク木^ノ從^フ純^ニ則^チ正^ク君^ノ從^フ諫^ニ則^チ忠^ニ
聖^ナリト又^キ說^ク苑^ニ云^ク有^テ功^ニ而^シ不^レ賞^セ
則^チ善^ニ不^レ勸^ム者^ハ過^リ而^シ不^レ誅^セ則^チ惡^ニ
不^レ懼^ムト云^ハリ漢^ノ書^ニ曰^ク敬^ス賢^ニ如^ク大^ノ賓

愛^ス民^ヲ如^ク赤^子ト云^ハリ外^ニ先^哲ノ
格^ノ言^ヲ諱^ミタリ愛^ス曰^ク木^ノ御^ノ政^ニ
道^ト申^ハカケテクモ天^ノ求^モ
大神^ノ君^ノ御^ノ規^矩ヲ守^セ玉^ヒテ
天下^ノ政^道御^ノ在^スコトヲテハ馬^ノ
外^ニテ治^リ早^ク奉^ル患^心味^ノ賊^ニ民^ノ也
夫^レ日^ノ甚^ク和^照ノ域^ニ樂^ニ異^ニ國^ノ

彗星ハ大山星也
二星ノ事ヲ考

龍衣来人^モ思^モしナク^モ賤^モい^モら^モひテ^モ德
シ^モスル^モ誠^モ有^モカタキ^モタ^モメ^モシ^モイ^モレ^モ
大君ノ大規矩ハ中々^モウ^モク^モウ^モク^モウ^モク^モウ^モク^モ
カ^モチ^モヌ^モル^モモ^モ、知^ル所^ニア^ラズ^ニ然^ルニ^モ往^ル
言^ハ文^四申^辰ノ^甲年^九月^の日^のり^とく^ら
彗星^の出^現志^をり^け給^ハ諸^講書^の特^以是^を曰^ハ
林^云各^考之^曰諸^書特^以是^を曰^ハ
大^彗星^亦天^災星^長四^丈或^出
出^生一^於東^方一^則豊^年ノ^證ト^云々

げ^叶の^如か^了日
凡^吹ぬ^清世^をを^莖と^爲し
元^小陰^をわ^くさ^いと^く水
天^下一^の君^様の^出身^をり^し
地^のり^とい^はれ^りと^く川^をり^し
大^とり^くそ^の意^を一^言立^中之^の意
り^しは^正し^けり^しに^政を^施し^し
之^行を^つ去^む時^を大^函之^川
大^昔と^りん^天愛^地妖^ハ人^君の

政道と云ふは先師の遺説遺説也

松平新太師及家士徳川氏并

古来の家士師中氏の徳信

聖人の御教教ハ其國風其俗俗り從從く

教教を其其の俗俗に依依り其其法法万世

不易とし東夷西戒戒ハ孰孰何何きり

是是ハ飯服やもんや然然ると近世の學士

才才といふ漢字の才才と才才と云ふは文字

言ひよりられ聖人の立玉の才の

才才と云ふは才才と云ふは才才と云ふは

の才才と云ふは才才と云ふは才才と云ふは

才才と云ふは才才と云ふは才才と云ふは

意味又才才の才才と云ふは才才と云ふは

才才と云ふは才才と云ふは才才と云ふは

才才と云ふは才才と云ふは才才と云ふは

才才と云ふは才才と云ふは才才と云ふは

才才と云ふは才才と云ふは才才と云ふは

い書面通りナレハ
儒者ノ誤リトハ
仕カタシモトヨリ其
人ヲ知ラサレハ藤服
ノ人ヲ亭王致屈
スルハ如何別ニ德行
ニテモアルヤトナルヘシ

酒肴とかいしては、
六十斗の酒士藤服して来り、
いさうさ甚く、
はるく送り、
の儒士と、
教甫小致、
ふの仁と、
くう、
我も徳と致ひて

予法ノ達人ノミニテ
ハ徳トハイハリス如何

形を致ふ、
未句、
さ、
り、
く、
抱、
今、
定、
と

遷有ト 此言尊公
 但來汎字 律令之法
 本朝正サシ 神道ノ
 奥義ヲ不知 必ス要ムル
 太宰海軍ノ 甚ク其
 所著經濟 録傳言ハル
 二文ハルニ
 云リ

遷有ト 此言尊公
 但來汎字 律令之法
 本朝正サシ 神道ノ
 奥義ヲ不知 必ス要ムル
 太宰海軍ノ 甚ク其
 所著經濟 録傳言ハル
 二文ハルニ
 云リ

班固ハ漢書班
 曄ハ後漢陳壽
 カ三國史是三十
 言行ハ前ニ定マ
 其外晋ノ仲立
 リテハ益甚シ王
 戎阮籍嵇康
 カ如キ也云々

其書向ク一ニ針やその才知れよ
 たりぬぬけ大規那を知り信
 少く時時とゆひわらるる
 謙懐やむすも子もり人そと
 文字とぬめとも大乃と去りし
 人こりあつり史記小記最去大者
 の下よれ之く飛しし加ら名
 道く身きりりはる天の乃と
 云一り之人行ふ時を別書師

此言よく三合フヤ不審

まきこ

品川街門の詠話

或人本品川へ用をこく昔時

行多ふ品川のころまよ大い

彼ありくあさのまよふに

く田けつりいつきのにどり遊

やとの羽もあ入りく田けつをむ

りれあ入りく上田門也総介とあ

松平上総分志輝
訖後高田城主
六十七石
東昭言九人目ノ御子
仲母ハお弟阿ふと

あまのまゆ盛衣記第九ノ巻ニあり

孫の大徳言志長
あまのまゆ
あまのまゆ
孫遠ま六十五
五〇石
也亦同書第廿
四

大坂一丸の後罷りていふ今信長孫

の川信長孫りあこ後駿河大徳を

川の物り安りうつて今品川の

門と知り往還の縁人品月と見え

又ハあまのまゆもあ入りく上総

今あまのまゆ孫りあこ後駿河

測川へもこ一人の入りあまのまゆ

終り人のつてあまのまゆと見え

入りあまのまゆ孫りあこ後駿河

坂川陣りのあえりくも身土城
却一ふお又駿河大納言及
家夫云此一般の心之中へ前於軍
者忠云とけいなり天と儀
地内意なる中一と
大跡君とさうい家夫とさうい
甲くさゆるり者忠云此境界の
前年跡君と道に甲入る道
塞くけり家夫云此悲歎極るなり

前於軍に心意なりとれ此對向の
別心痛中の事なる也一そ此大納言
心動なりと教先は地内見は作
外はとと心怖と也お國様は落度
地り心枕おしり一色の文と心は
是と見えとよの上とくころ
家夫云上見ふとく此事云と
由る心重し心証なりと
新い文なるかこは後大納言上列

いふ百ありはらひし政及なり
大小とト世の世ととれ玉人
とをくく信りけるは者我あり
け者人け世ありとらん

井伊家の士忠言の言の後

古くより君をい富^寶化^珍り玉財^珍以て
宝トせ人清^寶廉^珍道^珍言^珍ノ吉^珍以^珍ラ宝^珍トス

客より近に不意損の城に井伊掃
部左衛門守中少将おまふ今と云
このあしつ戸法よく掃部左衛門
ゆりしをせりし事その是は忠告要
この方とハ忠告ありと人々をく候
約を守りに困窮はと俄のよみん
るを川くハ川用り新をいを殿
の制法もあよといよくい
檢物とせり土急後そく候りた

身おしと定しとく^んとく^ん掃^ん掃^ん氏
及ぬり^りみ^んく^りれ^りい^りの^り凡^ん義
とふ^ん忘^んた^くり^りふ^り先^ん儉^ん物^と行^は
ひ^くく^ふく^いく^いく^い儀^の時^も此^の
え^くた^く料^理調^味さ^らら^くお
川^よしを^か八^五ち^りを^ま芋^鹿鹿^こ
拾^現採^たたの上^を子^とけ^りり^す
い^ち中^のの^とり^り子^を理^りり^り下^りり^り
る^くこ^も人の^生儀^一根^よハ^ちを^まめ^り

此言古今に通
シテ、金言ヤ

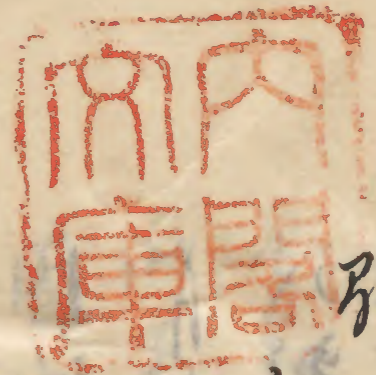
ぬ^とぬ^とさら^とと^ぬと^ぬの^ぬと^ぬ
し^ぬり^法が^多ら^さを^あら^さと^ぬの^ぬ
子の^内分^百百^のう^ら分^十十^の内^り
一^らと^あら^く法^がり^せよ^らより^類
り^法が^とが^いぬ^しと^家中^せり^り
く^かし^のぬ^くの^ちり^結が^よめ^か
ん^とま^くん^よ山^りる^根り^法が^り
と^云は^りえ^りり^物ら^りり^家中^り
一^根り^とえ^りり^あら^さり^りた^りの^ぬ

とわね柄と紙とを京の衣類を
いれり入とるい書居りいほと
りり者一旅とし又陽つととら
けを焼味味之儉物なりけり
因京のしと俄とよのせんと目
り走ぬとのことと多細と作ら
晝の夜子給ふを京とらかの時
或士の舞ねかりぬあう白を
写り鳥とほひあうと見えひと

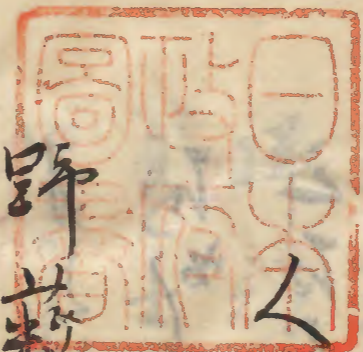
主人の
才ととすスレハ百むしるふとこけ士と
はかし急なりか時一とむしる
之をふとむしと係りて家持と
しと人子才とよとと持ると
よとあふとこ家持員破廉之世
り外のとあふ時家持とと
ハかきしととととととと
ふ限ととととととととと
首尾ととととととととと

奔傳やまてり名実云と天下り

引く



木井と携ハムし七年と致るトえの
一倍及なりくはるもつう
行ハ行してハ人服も月己ハ行
たはてんとまんとセハいんた
人服もハわ



野菰後福雜録卷ノ七終

